江戸時代の女性――町人階級の生活を垣間見る

江戸時代における女子への《教育》――木版本として流布した教訓書・実用書類から

「往来物（おうらいもの）」…手習い塾（寺子屋）や家庭において使用された、現代における教科書に相当する類の書物。手紙文例を集めた形式のものが主で、江戸時代には多くの情報と挿絵とを盛り込んだ木版本が出版された。広範な需要に応じ、江戸時代を通じて、約 7000 種の往来物が出版されたといわれる。

> 日本の近世における識字の特徴のひとつは、原則として女性が使用する文字と男性が使用する文字が異なっていたことにある。女性は大部分が「かな」で一部漢字が混ざった「和文体」を用い、男性は主に「漢字」による「準漢文体」を使用した。ここにおいて、女性に特有な書記方やテクスト・教科書などが発達していった。その一つが女子往来である（中略）その数は千種をこえて千五百種類程度に及ぶのではないかと推測される。
>
> 江戸時代の女子教育は、階層によってかなり異なる様相を呈していることに注意が払われなければならない。「教訓型」の女子用往来に描かれた女性像は、封建的身分制度の男尊女卑の思想に基づく「理念」としての女性像である。これは、武士階級における女性の特別な地位と任務、深い精神鍛錬の涵養に近いものである。一方、庶民階級―特に中層以上―の女性は、理念としては男性や夫の下に置かれながらも、実生活では家業に経営手腕を発揮し、冠婚葬祭や社交にまで采配をふるうことが求められた。したがって、武士階層の女性における教養内容と庶民階層における女性の教養内容は、必然的に異なっていた。理念としての「建前」を女性に教えようとする「教訓型」の女子用往来に対して、庶民の実生活に求められる教材を提供していたのが「消息型」の女子用往来である。「消息型」の女子用往来は、その種類も数も「教訓型」と並ぶ趨勢を誇っていた。筆者がこの「消息型往来」に注目したのは、「建前」とはかなり異なる女性の日常生活が描かれているからである。
>
> （天野晴子「江戸時代の女子教育について――往来物を通してみる女性の教育と生活――」生活文化研究所年報 21，2008）

〇天野晴子氏による女子用往来物の分析

- **教訓型**…「実生活に対する心構えや道徳、躾を中心に説いた内容」
  ※中世から引き継がれた伝統的な女性像と、封建的な儒教倫理に基づく女性像

  例：『女大学宝箱』（1716 刊）

- **消息型（手紙文例）**…「生涯の節目、生活のさまざまな出来事に際して必要とされる題材」
  ※日常生活を営む上で不可欠なコミュニケーションツール「手紙」の文例

  例：『女用文章大成』（1698 刊）

元禄期(17 世紀末)の女性向け実用書――『女重宝記（おんなちょうほうき）』

『女重宝記（おんなちょうほうき）』…苗村丈伯著。五巻五冊。元禄五 1692 年 京都吉野屋次郎兵衛・大坂伊丹屋太郎右衛門・江戸万屋清兵衛刊。武家や上流の長に階級に属する女性を対象としているが、庶民にまで広く読まれたと思われ、江戸時代を通じて普及し、後続の女性用往来物や実用書に甚大な影響を与えた。

・目次 ※副題は省略

巻一「女中万たしなみの巻（じょちうよろづ）」…①女は人間のはじまりの事 ②身のやうじやうならびに四火の灸の事 ③女品さだめ④女しが物がたり ⑤女ことばづかひ ⑥女けしやうの事 ⑦衣類の沙汰

巻二「しうげんの事」…①しうげんの次第 ②よめどりいひ入并日どりの事 ③しうげん道具の次第 ④同座の次第 ⑤しうげんの夜膳部六物の次第 ⑥御厨子黒棚かざりやうの事 ⑦手の道具かざりやうの事 ⑧酌くはへしやうの事 ⑨常の盃にて酒のみやうの事 ⑩女中万喰方の作法

巻三「くわいにんの事 子そだてやう」…①懐妊の事ならびに養生の次第 ②懐妊か懐妊にあらざるをしる事 ③同身のもちやう ④同帯をする事 ⑤産のときむかひてよき方の事 ⑥同いむべき衣裳 ⑦知死期くりやうの事 ⑧産前に拵おくべき物の事 ⑨産にのぞみて心得の事 ⑩産後養生 ⑪女の年によりて産のよしあしの事 ⑫月によりて生れ子のよしあしの事 ⑬難産の妙薬 ⑭産後乳はれ傷む薬 ⑮むまれ子の次第 ⑯むまれ子養生の事 ⑰女中方服忌令

巻四「しよげいのまき」…①手ならひの事 ②哥をよみならふ事 ③琴三味線を引事 ④貝おほひかたかるたの事 ⑤香をきく事 ⑥掛香の名方 ⑦きやらの名 ⑧女中諸病めうやく ⑨万しみものおとしやうの事

巻五「女節用集字尽」…①女用器財之部 ②同衣服之部 ③同絹布之類 ④同絹布染色之名 ⑤同詞字等類 ⑥源氏物がたり目録 ⑦かなつかいをしる事 ⑧五節句の事 ⑨新大和言葉 ⑩小笠原流万包やう折形之図

元禄期(17 世紀末)の商工業――『人倫訓蒙図彙』より

『人倫訓蒙図彙』…七巻七冊。元禄三 1690 年 京都村上勘兵衛・大坂村上清三郎・江戸村上五郎兵衛刊。

巻一：様々な身分階級の服装や用具などの図解・解説。

巻二：「能芸部」。学問や芸能に関する項目の図解・解説。

巻三：「作業部」。農業・林業・漁業や手工業などに関する項目の図解・解説。

巻四：「商人部」。都市部における商人に関する項目の図解・解説。

巻五：「細工人部」。三都を中心とした手仕事職人に関する項目の図解・解説。

巻六：「職之部」。衣食住や生活を支える職人に関する項目の図解・解説。

巻七：遊興・享楽関係、また乞食類に関する項目の図解・解説。

「五百以上の各種の職業の職能・由来のほか、当時地名の商人・職人やその所在地を記し、商工案内の役割も果たしている。その説明は俗説に拠った箇所もあり、正確さに欠けるが、これが当時の常識であった証左にもなろう。また、挿絵は日常生活において嘱目したところを写生したものと思われ、写実性に富んでいる。」（『日本古典文学大辞典』より、項目執筆者…前田金五郎）

・各巻掲載の職種

巻　数	職　　種
巻三 （作業）	茶師・農夫（種蒔・田植・耕・稲掻）・牛飼・樵夫・柴売女・杣人・筏師・塩焼・渡守（高瀬舟）・石売女・伏見下船・蜑人・漁人・船頭・鵜遣・鯨舩・猟師・綿師・炭焼・円座・莚打・土器師・瓦師・焼物師・火桶作・御座打・占師・石伐〈石切〉・漆掻・葛根堀・蕨根堀・車遣・梃者・木遣・乳子買・紙屑買・砂土売・魚荷持・飛脚・馬方・駕籠借・旅籠や・おちやない・談義坊売・山椒皮
巻四 （商人）	呉服や・御綿屋・糸や・椀家具や・唐物や・質や・古手屋・切屋・道具屋・持遊納物や・醤油（酒）・酢・麹師・味噌屋・紙屋・小間物や・本屋・薬種屋・鮫屋・鍔屋（刀屋）・両替や・銅屋・鉄や・瀬戸物や・荒物や・帷屋・綿屋・米屋・魚屋・八百屋・小鳥や・漆屋・砥屋・材木や・竹屋・竹皮屋・庭石や・下草や・櫨や・挽茶や・薪や・若莨屋・草履や・油屋・麺類売・焼豆腐師・口上商人・絵双紙売・粉や・石灰屋・御座・木綿や・蚊帳や・植木や・蘭奢粉・叩納豆・法論味噌
巻五 （細工人）	金彫師・絵師・筆師・球摺・仏師・経師・表具師・櫛挽・印判師・縫物師・扇折・蒔絵師・時計師・針摺・縫針師・額彫・木彫師・面打・青貝師・角細工・錺師・象眼師・銀師・幾世留張・無郎竹師・鈴張・茶入袋師・巾着師・紙入師・眉作・人形師・意匠人形・張子師・雛師・楊枝師・茶杓師・物指師・箸師・刷毛師・嘉留多師・賽師・胴人形師・団師・簇削・鐘木師・楊弓師・造花師・形彫・堆朱彫
巻六 （職人）	大工・木挽・左官・屋根葺・布曝・柄巻師・天秤・鋳物師・鏡獅・畳師・薄師・板木彫・駕籠師・表紙屋・秤師・編笠・桧物師・指物師・乗物師・数珠師・鞴師・水嚢師・墨師・印籠師・葛籠師・笠張・塗笠・桝師・紙子師（紙漉）・硯師・羽織師・翠簾師・塗物師・金粉師・鍮泥師・水引師・合羽師・白粉師・蝋燭掛・薬缶師・鞠装束師・宮殿師・小刀磨・鍛冶・刀鍛冶・鑓鍛冶・投毛貫・小刀便利刀・琴師・弓師・仏具師・錫師・唐紙師・針鉄師・箒師・戸障子師・釜蓋師・竜骨車師・箋師・鋤鍬柄師・梭掻・車作・竈師・紺屋・沙室師・紅師・茶染師・紫師・練物強物師・白師・糸車師・豆腐師・麩師・蒟蒻師・素麺師・菓子師・餅師・粽師・煎餅師・道明寺師・興米師・麩焼師・飴師・地黄煎・焼餅師・飯鮨師・割肴師・香煎師・鎧・着込・弦・植虎皮師・雪踏師・尻切師・革師・滑革師・桶結・足袋師・碓・風呂屋・銀掘・鑓物師・鋳掛師・湯熨や・洗濯・綿摘・機織・鹿子結・木綿打・足打・ゑほし師・はこいたや・ゑむま師・かづら師・位牌師・龕師

参考①:井原西鶴作『西鶴諸国はなし』巻1の2「見せぬところは女大工」(貞享二 1685年刊)

道具箱には、錐・鉋・すみ壺・さしがね。顔も三寸の見直し、中びくなる女房、手あしたくましき、大工の上手にて、世を渡り、一條小反橋に住みけるとなり。

「都は広く、男の細工人もあるに、何とて女を雇ひけるぞ」

「されば御所方の奥つぼね、忍び返しのそこね、または窓の竹うちかへるなど、すこしの事に、男は吟味もむつかしく、これに仰せ付けられけるとなり」。

(「都は広く、男の大工・指物師も多数いるのに、どうして女大工を人は雇うのか」
「それは御所方の奥の女部屋の、忍び返しの破損、または窓格子の竹を打ち替えるなどの、簡単な仕事でも、男の大工では身元調べも面倒だから、そのような時にはこれに仰せつけられるということだ」。)

(新編日本古典文学全集 67『井原西鶴集②』小学館より)

参考②:井原西鶴作『西鶴諸国はなし』巻4の1「忍び扇の長歌」(貞享二 1685年刊)

(江戸上野の出来事。大名家の姫に身分違いの恋をした若侍は、その大名家に仕えることとなる。
想いを交わした二人は駆落ち、麻布の小さい裏店に隠れ住んでいた。)※当時、駆落ちは犯罪。

…すこしの裏棚を借りて、人しれず住みけるに、**何の心もなく出たまへば、世を渡るべき種もなければ、御守わきざしを、少かの質に置きて、月日をおくらるるうちに、またかなしく、男は夜々、切疵の膏薬を売れどもはかどらず。後にはせんかたつきぬれば、手なれたまはぬ、すすぎせんだく、見る目もいたはしく、近所も不思議を立てける。**

(…姫は何の用意もなく屋敷をお出になったので、日々の生活の種もなく、お守りの脇差を少額の金の質物に置き、月日をお送りになっているうちに、また窮乏してきて、男は夜々、切り傷の膏薬を売りに出たが、売れ行きもはかばかしくなく、後には生活する手段もなくなってしまったので、姫は慣れていらっしゃらない洗濯の仕事をするようになった。それは他人が見ていても痛々しいので、近所の人々もへんなことだと噂しあった。)

(新編日本古典文学全集 67『井原西鶴集②』小学館より)

参考③:《理想的な人妻像》――井原西鶴作『好色五人女』(貞享三 1686年刊)

(大坂天満に住む樽屋は、大店の奥女中・おせんに恋い焦がれる。紆余曲折を経て、晴れておせんと結婚した場面。)

…夫は正直のかうべをかたぶけ、細工をすれば、**女はふしかね染の縞を織りならひ、明くれかせぎける程に、盆前、大晦日にも内を出違ふほどにもあらず、大かたに世をわたりけるが、殊更、男を大事に掛け、雪の日、風の立つ時は食つぎを包みおき、夏は枕に扇をはなさず、留守には、宵から門口をかため、ゆめ／＼外の人にはめをやらず、物を二ついへば、「こちのお人／＼」とうれしがり、年月つもりてよき中に、ふたりまでうまれて、なほ／＼男の事をわすれざりき。**

(妻はふしかね染の縞物を織り習って、明け暮れ共稼ぎをしたので、盆前や大晦日の決算日にも、借金取りを避けて家を逃げ出すほどのこともなく、人並に世を渡っていたが、おせんはことに亭主を大切にして、雪の日や風の吹くときには飯櫃を包んでおき、夏は枕元に扇をはなさずあおいでやり、亭主が留守のときは宵のうちから門口をしっかり閉じて、夢にもほかの男には目もくれず、二言目には「こちのお人、こちのお人とうれしがり、こうして年月積もって、睦まじい夫婦の仲に子供が二人まで生れ、なおいっそう夫のことを忘れず、大切にしたのであった。」

(大経師は、おさんの美貌に一目惚れし、仲人を立てて再婚する。※大経師…朝廷の御用職人。暦発行の権利を有した。)

…花の夕、月の曙、この男、外を詠めもやらずして、夫婦のかたらひふかく、三とせが程もかさねけるに、**明暮、世をわたる女の業を大事に、手づからべんがら糸に気をつくし、すゑ／＼の女に手紬を織らせて、わが男の見よげに、始末を本とし、竈も大くべさせず、小遣帳を筆まめにあらため、町人の家にありたきは、かやうの女ぞかし。**

(おさんは、明け暮れ、世を渡る女の仕事を大事にして、自ら苦労して、べんがら縞の糸作りに精を出し、下女どもには紬を織らせて、わが夫の身なりをさっぱりさせ、倹約を第一にし、竈も薪を無茶にたかせず、小遣帳を面倒がらずに吟味して付けた、町人の家にありたいのは、このような女である。)

(新編日本古典文学全集 66『井原西鶴集①』小学館より)